

青年期における心理学的健康の基本的構造

諸 井 克 英

I. 問 題

従来の伝統的な青年心理学の枠組みでは、青年期は、“子どもから大人への過渡期”として位置づけられ、さまざまな心理的危機によって特徴づけられる。このような考えを青年期危機説と呼ぶ。しかし、加藤(1987)によれば、青年期の区分変化の問題に加え、児童期から成人期への移行が連続的であり、“疾風怒濤”的な危機が認められないという研究知見が現れ、前述の青年期危機説に対して、青年期平穏説として対置される。本研究では、心理学的健康の観点から、青年期の基本的心性を明らかにするための予備的検討を行う。つまり、心理的危機の有無を個別臨床事例の呈示によって論じるよりも、まず心理学的健康の全体的様相を明確にし、その発達の特徴を捉えることによって危機説と平穏説のそれぞれの妥当性を検討すべきであると思われる。そのために、青年期の心理学的健康の基本的構造を明らかにすることが重要な作業となる。

心理学的健康とは、Compton, Smith, Cornish, & Qualls(1996)によれば、a)個人的成長(肯定的な心理学的性質や潜在的可能性の完全な発達)、b)主観的幸福感(肯定的情動性と、自分の人生の受容可能性に関する認知的判断)、c)ストレス耐性的性格(心理社会的ストレスに対する免疫系反応や抵抗などの、身体的健康を促進する変数)の3側面から構成される。彼らは、既存15個の尺度を実施し、主成分分析によってa)とb)の2主成分を認めた。

平石(1990a)は、青年の自己意識の観点から心理学的健康を問題にし、a)健康—不健康、b)對他者—對自己という2つの軸に基づいて心理学的健康の諸側面を明らかにすることを試みた。彼は、青年期臨床事例研究に著された青年の否定的で病理的な自己意識と肯定的で健康な自己意識を、他者との関係と自己自身という観点を加味しながら、抽出した。青年期にある者を対象とした予備調査や心理臨床家による吟味を経て、165項目から成る調査票を作成した。

この尺度は、先述した2つの軸に基づいて、“健康－対他者”，“健康－対自己”，“不健康－対他者”，“不健康－対自己”の4尺度から成る。

彼は、4尺度ごとに主成分分析(プロマックス回転)を行った上で、それぞれの分析で得られた主成分得点を対象とした主成分分析(プロマックス回転)を試みた。その結果認められた主成分を、“自己確立感”と“自己拡散感”と名づけ、Erikson(1959)の自我同一性の考えに基づいて意義づけた。つまり、前者を自我同一性の確立、後者を自我同一性拡散と対応させた。

後続研究では(平石, 1990b), まず先行研究(平石, 1990a)のデータが再分析された。先述した2軸のうち“対他者－対自己”の軸に従って、対自己領域と対他者領域別に主成分分析(プロマックス回転)を行い、対自己領域では、自己実現的態度、不決断・自己不信感、充実感、自己受容、非現実感・衝動性、対他者領域では、内閉性・人間不信、自己表明・対人的積極性、被評価意識・対人緊張、対家族関係の各主成分が得られた。平石は、このうち、それぞれで3つの主成分に限定し(対自己: 自己受容、自己実現的態度、充実感; 対他者: 自己内閉性・人間不信、自己表明・対人的積極性、被評価意識・対人緊張)、それぞれで8項目ずつ選び項目表現を一部改め合計48項目の尺度を再構成した。この尺度を中学生、高校生と大学生に実施し、2領域ごとに主成分分析を試み、各発達段階で設定通りの主成分が現れることを確認した。

ところで、平石(1990a)の作成した尺度項目は、臨床事例研究に基づき広範囲に収集された項目に由来している。その点で、青年期の心理学的健康を包括的に捉えていると評価できる。しかし、次のような問題点を抱えている。彼の研究では、a)健康－不健康、b)対他者－対自己という2軸に従って、領域ごとに分析が行われているが、この2軸自体は未検討のままである。つまり、心理学的健康が4領域から成るのか曖昧にされている。さらに、高次の主成分分析で認められた2主成分についても問題が残る。自己確立感主成分に負荷が高い下位尺度は、健康方向に表現された項目から構成され、自己拡散感主成分に負荷が高い下位尺度は、反健康方向に表現された項目によっている。したがって、2主成分が心理学的構成概念を反映しているというよりも、単に反応スタイル上の人工的結果である可能性もある。類似した問題は、たとえばRosenbergの自尊心尺度に関して扱われている(Marsh, 1996)。いずれにせよ、a)健康－不健康、b)対他者－対自己という2軸の前提の吟味を踏まえた上で、心理学的健康の基本的構造の再検討を行う必要がある。これを本研究の第1の目的とする。

先述した青年期に関する危機説と平穩説の対置は、青年期を単一概念で理解しようとする観点からは妥当かもしれない。しかし、二律背反的に対置するよりも、さまざまな心性パターンをもつ青年が存在していると考えられることもできる。岡田(1991, 1993)は、臨床的事例や社会評論の中で論議されている青年像を整理した上で、対人関係のあり方の意識を中心とする質問紙調査を行った。その結果、種々の論議の中で指摘されているいくつかの青年像がクラスターとして抽出されることが見出された。たとえば、第2研究では、ふれ合い恐怖的心性群、伝統的青年群、群れたがり志向群という3クラスターが現れた。青年の心理学的健康を問題対象とする本研究でも、単に基本的構造の抽出にとどまらず、心理学的健康という点から青年の分類を試みる。つまり、本研究の第2の目的として、心理学的健康—不健康という次元で捉えるだけでなく、得られたいくつかの次元でのパターンという点から青年の心性の多様性を把握できるかを探索する。

本研究の第3の目的として、心理学的健康に関わるいくつかの既存の尺度を同時に実施し、平石による尺度との関連性を検討する。ここで取り上げる心理学的概念は、うつ、孤独感、および自尊心である。うつとは、日常生活での一般的な失敗経験の反復によってもたらされる意気消沈した状態であり、孤独感とは、対人関係での不全に由来する不快経験である。また、自尊心とは、自己に対する一般的な肯定的感情である。これら3概念は、測定上では高い相互相関をみせるが、因子分析上は弁別可能である(諸井, 1991; 1995参照)。これらの概念は、日常生活の中で生起する重要な感情として心理学の中で伝統的に扱われている。これらと平石による尺度で測定される側面との対応関係を調べておくことは、重要であろう。また、平石の測度は心理学的健康面に限定されているが、たとえば、健康心理学では、健康は心と体との密接な関係が前提とされている(日本健康心理学会編, 1997)。このことを考慮して、身体の一般的不満感との関連も付加的に検討することにする。

これら3つの研究目的のために、青年期にある男女を対象とする調査を行った。

Ⅱ. 方 法

質問紙の実施と被験者

調査対象者は、静岡大学、常葉学園大学、名城大学、常葉学園富士短期大学、

静岡県中部看護専門学校の男女学生である。心理学に関連した授業を利用して質問紙が実施された。調査の実施状況をTable 1に示す。a)25歳を越える学生やb)記入漏れなどの不適切な回答をした者を除外し、残りの604名(男子259名, 女子345名)を分析対象とした。対象者全体の平均年齢は, 19.41歳($SD=1.07$; 18~23歳, $N=604$)である。男子の年齢($m=19.63$, $SD=1.15$, 18~23歳, $N=259$)が女子($m=19.26$; $SD=.97$, 18~23歳, $N=345$)に比べて少し高かった($t=4.18$, $df=500.44$, $p<.001$)。

Table 1
調査の実施状況

		-実施総数-		-対象者数-	
		男子	女子	男子	女子
〔第1次: 1996年〕					
常葉学園大学教育学部	10月26日	4	15	4	14
静岡大学人文学部	11月5日	62	24	59	24
常葉学園富士短期大学	11月18日・25日	24	101	23	98
名城大学法学部・農学部	11月21日	49	35	48	35
中部看護学校1年次	11月7日<配付1週後回収>	3	40	2	32
〔第2次: 1997年〕					
静岡大学人文学部	6月24日	40	44	36	44
常葉学園大学教育学部	9月27日	5	28	5	28
常葉学園富士短期大学	9月29日	27	37	24	36
静岡大学共通教育	10月2日	62	36	58	34
合計人数		276	360	259	345

質問紙の構成

本研究で用いた質問紙は, 基本的属性に加え, 2つの自己観(相互独立的自己観, 相互協調的自己観)を測定するための尺度, 心理学的健康尺度, 社会的アイデンティティ尺度, 身体・精神的健康尺度, 自尊心尺度から構成される。ただし, 本研究では, 2つの自己観を測定するための尺度と社会的アイデンティティ尺度については, 省略する。

(1) 心理学的健康尺度

被験者の心理学的健康を測定するために, 平石(1990a)が作成した尺度を以下のように改変した。平石は, 青年期にある者の自己意識をa)健康-不健康, b)対他者-対自己という軸に基づいて4分類し, 4つの下位尺度を作成した。

各下位尺度で3主成分を抽出した。本研究では、平石の第1次主成分分析の主成分負荷量に基づき、以下のようにして各主成分の代表項目を4～5個選抜した。a)主成分負荷量が.500以上であること、b)各主成分名に内容的に適していること。このようにして、57項目を選択した。再度、項目の表現を予備的に検討し、一部の項目については内容を損なわないようにして修正を加えた。これらの項目をAppendix 1に示す。

“最近6ヶ月間の自分の状態にあてはまるかどうか”を基準にして、これらの57項目について4点尺度で評定させた(“4. かなりあてはまる”, “3. どちらかといえばあてはまる”, “2. どちらかといえばあてはまらない”, “1. ほとんどあてはまらない”)。心理学的健康が高いほど、高得点になるように得点化した。

(2) 身体・精神的健康尺度

諸井(1996)は、身体的不調、うつ、および孤独感の3側面を測る身体・精神的健康尺度を作成している。23項目から成るこの尺度をAppendix 2に示す。各項目について“この6ヶ月”という基準でどのくらい感じるかを4点尺度で回答させた(“4. たびたび感じる”, “3. ときどき感じる”, “2. めったに感じない”, “1. けっして感じない”)。身体的不調状態、うつ状態、および孤独状態を示すほど、高得点になるように処理した。

(3) 自尊心尺度

自尊心を測定するために、Rosenberg(1979)の自尊心尺度を利用した。この尺度をAppendix 3に示す。各項目が回答者にあてはまる程度を“この6ヶ月間”という基準で、4点尺度で評定させた(“4. かなりあてはまる”, “3. どちらかといえばあてはまる”, “2. どちらかといえばあてはまらない”, “1. ほとんどあてはまらない”)。自尊心が高いほど、高得点になるようにした。

なお、以上の3尺度について、項目の順序効果をなくすために、項目順の異なる尺度を用いた。(1)では3タイプ、(2)と(3)ではそれぞれ2タイプの尺度を使用した。

Ⅲ. 結 果

心理学的健康尺度

平石(1990)は、4つの下位尺度(健康—対他者、健康—對自己、不健康—対

他者、不健康－対自己)ごとに主成分分析を行い、その上で、各主成分を対象とする第2次主成分分析を試み、自己確立感主成分と自己拡散感主成分を得ている。本研究では、まず、項目水準での平均値の吟味を行った上で、平石の仮定した構造に関する妥当性をLISREL 7(Jöreskog & Sörbom, 1988)によって行った。つまり、観測変数の背後に1次因子(平石で得られた第1次主成分)と2次因子(平石によって仮定された4つの下位領域<健康－対他者、健康－対自己、不健康－対他者、不健康－対自己>)を仮定した高次主成分分析を男女別に試みた。しかしながら、いずれの場合も、a)適合度指標が低い、b)項目の負荷量が低い項目がかなりあるなど、“健康－不健康”と“他者－自己”を軸とする構造の妥当性が得られなかった。また、2次因子も変えて(たとえば、健康領域と不健康領域)、再度試みたが、明確な構造を確認できなかった。そこで、本研究では、尺度項目全体を対象とした主成分分析を行い、心理学的健康の基本的構造を探ることにした。

(1) 項目平均値の吟味

まず、項目平均値の男女差を t 検定によって検討したところ、17個の項目で有意差がみられた。男子のほうが女子よりも健康的である項目は、13項目あった(5%水準; 8, 9, 13, 14, 17, 22, 33, 34, 38, 47, 53, 56, 57)。逆に女子のほうが健康的であることを表す項目は、4項目あった(5%水準; 2, 16, 27, 51)。

次に、項目平均値がa)1.5を上回るか、b)3.5を下回るかを t 検定によって調べた。男子では項目5, 15, 50, 55が、女子では項目2, 5, 55が、3.5点を有意に下回らなかった。

以上の分析の結果、心理学的健康の構造の検討は平均値の男女差が構造に反映する可能性を回避するために男女別に行い、男女それぞれで3.5点を有意に下回らなかった項目については、以下の分析では除去することにした。

(2) 主成分分析

心理学的健康の基本的構造を調べるために主成分分析を行った。この主成分分析では、直交回転と斜交回転(直接oblimin法, $\delta = 0$)を試みたが、相対的に明確な結果が得られた直交回転を採用した。

①男子

53項目を対象として主成分分析(直交回転)を行った。固有値の推移状況は、11.572, 4.012, 3.490, 2.684, 2.133, 2.018, 1.694, 1.478, 1.249, 1.201, 1.108, 1.039, .991...であった。固有値1.00以上の解について、主成分負荷量.400を基準として各主成分を検討したところ、8主成分解が最も明確であった。そこで、

Table 2-a

男子における心理学的健康尺度に関する主成分分析(直交回転)の結果: 主成分負荷量

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	h^2
[I: 対人緊張のなさ] $\alpha = .844$; $Z = 1.405$, $p = .039$; $m = 2.33$, $SD = .60$									
8 (UO-2) 人に対して自分のイメージを悪くしないかと恐れている。	.803	.176	.109	.010	-.036	-.070	.081	-.109	.712
34 (UO-2) 人から何か言われないう、変な目で見られないかと気にしている。	.785	.237	.152	.025	.002	-.060	.016	-.101	.710
17 (UO-2) 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。	.653	.119	-.033	.187	.294	.109	.043	.139	.596
47 (US-2) 何をしても人の意見を求めてしまう。	.651	-.133	.220	-.050	.237	.109	-.062	.171	.594
56 (HO-1) 非難や反感を恐れない。	.582	.189	.060	-.092	.303	.018	.139	-.200	.538
41 (US-2) 何にでも迷ってしまう。	.528	.124	.066	.076	.181	.082	.163	.301	.461
22 (US-2) 気になると同じことをいつまでも考えてしまう。	.514	.105	-.017	.107	.033	-.049	.009	.345	.410
11 (US-2) いろいろなことを考えてしまって結局行動できない。	.512	.132	.235	.130	.340	.085	.175	.228	.557
[II: 充実感] $\alpha = .843$; $Z = 1.360$, $p = .049$; $m = 2.54$, $SD = .62$									
32 (HS-2) 生活が楽しいと感じる。	-.025	.730	.251	.131	.040	.120	.045	.147	.653
37 (HS-2) 自分のはのびのびと生きていると感じる。	.159	.668	.138	.125	.276	.046	.049	.010	.587
4 (HS-2) わだかまりがなくスカッとした気分である。	.176	.656	.148	.047	.151	.120	.191	.094	.568
49 (HS-2) 心に余裕がある。	.270	.647	.137	.094	.101	.144	.175	.252	.644
46 (US-1) 満足感がもてない。	.059	.578	.329	.172	.094	.145	.076	.208	.554
54 (US-1) 心から楽しいと思える日がない。	.102	.540	.316	.325	-.043	.127	.004	.224	.576
23 (HS-2) 一日一日に心残りが無い。	.231	.431	.022	.096	.160	-.010	.033	.029	.276
[III: 自己実現的態度] $\alpha = .850$; $Z = 1.145$, $p = .145$; $m = 2.64$, $SD = .76$									
21 (HS-1) 自分の夢を実現しようと意欲に燃えている。	.022	.135	.798	-.005	.165	.041	.084	-.157	.713
45 (US-1) 自分には目標というものがない。	.122	.144	.791	.033	.125	.059	.049	-.000	.684
20 (US-1) 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない。	.095	.153	.768	-.013	.063	.046	.042	.102	.641
9 (US-1) 何も熱中できるものがない。	.117	.192	.706	.193	-.043	-.060	-.031	.094	.601
25 (HS-1) 情熱をもって何かに取り組んでいる。	.098	.166	.657	.174	.153	-.121	.039	-.087	.546
[IV: 開放性] $\alpha = .810$; $Z = 1.634$, $p = .010$; $m = 2.95$, $SD = .57$									
16 (UO-1) まわりの人との間に壁をつくっている。	.148	.255	.036	.739	.064	.013	-.007	.137	.657
51 (UO-1) 私は人を信用していない。	-.006	-.073	.031	.696	.022	.268	-.030	.063	.568
29 (UO-1) 自分は他人に対して心を閉ざしているような気がする。	.211	.284	.027	.653	.149	.084	.035	.021	.583
6 (UO-1) 人と打ち解けて話せない。	.109	.170	.112	.635	.345	.073	.160	.026	.607
27 (UO-1) まわりの人に好意的になれない。	.081	.270	.026	.576	.077	.085	.339	.024	.541
2 (HO-2) 気の許せる友だちがいる。	.032	.001	.246	.535	.229	.180	.044	-.037	.436
44 (HO-2) 特定の異性に対して恋愛感情を抱くことができる。	-.142	-.079	.238	.471	.302	.080	-.020	.191	.439
7 (HO-2) 皆と一緒にいるだけで安心感を得られるときがある。	-.311	.265	-.076	.465	-.049	-.060	.258	-.073	.467

Table 2-aのつづき

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	h^2
〔V: 自信〕 $\alpha=.798$; $Z=1.104$, $p=.175$; $m=2.53$, $SD=.68$										
13(HO-1)	疑問だと感じたらそれを堂々と表明できる。	.143	.084	.140	.151	.746	-.029	.183	.040	.662
1 (HO-1)	人前でもこどわりなく自由に感じたままを表明できる。	.249	.252	.106	.144	.670	-.063	.162	.024	.637
39(UO-2)	人前では何をしても動作がぎこちなくなってしまう。	.350	.127	-.003	.216	.556	-.021	-.037	.194	.534
31(HO-1)	自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている。	-.059	.228	.065	.182	.552	.121	.172	-.294	.528
52(US-2)	思ったことをすぐ行動にあらわせない。	.253	.222	.108	.196	.528	.016	.180	.146	.496
18(HS-1)	自分に妥協せずに真剣にぶつかっていつている。	.223	.037	.340	.091	.465	-.024	.044	-.072	.399
〔VI: 家族に対する肯定的感情〕 $\alpha=.780$; $Z=2.259$, $p=.001$; $m=3.26$, $SD=.61$										
40(UO-3)	家族とは肌が合わない感じがしている。	.020	.167	-.080	.161	-.038	.788	.029	.056	.684
53(UO-3)	親は自分を受け入れてくれていないと感じる。	.118	.012	.004	.095	-.071	.768	.092	.120	.641
10(UO-3)	家族は自分に対して理解を示してくれていないと思う。	.075	.129	-.005	.046	.076	.745	.052	-.002	.588
19(UO-3)	自分は家族の中ではいてもいなくてもいい存在だと感じる。	-.164	.072	.108	.226	.022	.656	.000	.136	.544
〔VII: 他者の受容〕 $\alpha=.689$; $Z=1.567$, $p=.015$; $m=2.94$, $SD=.51$										
35(HO-3)	自分とは違った意見を素直に受けとめることができる。	.044	.053	-.019	.031	-.087	-.039	.747	.057	.576
12(HO-3)	他人の良いところ悪いところありのままに認められる。	.059	.082	.049	-.000	.359	.076	.656	-.004	.578
26(HS-3)	自分の良いところ悪いところありのままに認めることができる。	.183	.099	.056	.076	.213	-.009	.612	-.071	.477
48(HO-3)	自分とは違った意見をもった人とも親しくできる。	-.081	.170	.003	.216	.068	.157	.552	.124	.431
3 (HO-3)	両親のことを一人の人間として客観的に見ることができる。	.110	-.039	.231	.005	.309	.068	.454	.157	.398
〔VIII: 現実感覚〕 $\alpha=.685$; $Z=1.856$, $p=.002$; $m=3.08$, $SD=.65$										
30(US-3)	うっ積した気持ちのためについ衝動的に行動してしまう。	.090	.284	-.044	.144	-.080	-.016	.234	.718	.688
57(US-3)	いらいらすると自分を抑えられなくなり衝動的になってしまう。	.212	.114	.088	.037	-.258	-.010	.293	.614	.597
33(US-3)	自分の身体が自分のものでないみたいに感じることもある。	-.068	.150	-.071	-.061	.205	.334	-.062	.600	.553
43(US-3)	現実の世界にいるのか夢の世界にいるのか分からないときがある。	.072	.143	-.000	.123	.163	.211	-.113	.552	.429
主成分固有値		4.192	3.720	3.652	3.607	3.453	2.704	2.561	2.474	26.362

N=259

初期主成分固有値 ≥ 1.400 , 初期説明率 56.1% α 値: 最終構成項目での α 係数; Z値: Kolmogorov-Smirnovの検定; m値: 構成項目の合計得点を項目数で割った値;

SD値: 標準偏差値

複数の主成分に重複して高い負荷を示したり、どの主成分にも高い負荷を見せない項目を除いて(項目14, 24, 28, 36, 38, 42), 再度8主成分分解を求めたところ、明確な解が得られた。これをTable 2-aに示す。

第Ⅱ主成分, 第Ⅲ主成分, 第Ⅷ主成分は、それぞれ自己の心理学的状態を表す項目から構成される。第Ⅱ主成分では、心が充実しており、空虚でないことを示す項目の負荷が高いため、この主成分は“充実感”と命名できる。第Ⅲ主成分で負荷が高い項目は、自己の目標に対する意欲を表しているため、これは“自己実現的態度”と名づけられた。第Ⅷ主成分は、自己感覚の安定性に関する項目から構成されており、“現実感覚”と呼ぶことにした。

対照的に、第Ⅳ主成分, 第Ⅵ主成分では、他者との関係に関わる心理学的状態を表す項目の負荷が高かった。第Ⅳ主成分では、自己と他者との間の心理的障壁を表す項目が高い負荷をみせていることから、この主成分は、“開放性”と命名された。第Ⅵ主成分に高い負荷があった項目は、家族に対する感情を表すので、この主成分は、“家族に対する肯定的感情”といえる。

次に、残りの主成分をみる。第Ⅰ主成分では、対人不安の有無と決断性に関わる項目の負荷が高いため、この主成分は“対人緊張のなさ”とした。第Ⅴ主成分に高い負荷を示した項目は、自己表明や自分の行動に対する自信を表しているため、これは“自信”と名づけた。第Ⅶ主成分は、負荷が高い5項目のうち4項目が他者を肯定的に受け入れることを示しているため、“他者の受容”と呼ぶことにした。もともと自己受容を表す1項目もこの主成分に高い負荷をみせているが、自己の欠点をも受容できるのは他者の受容を前提としているからと解釈できよう。

②女子

54項目を対象として主成分分析(直交回転)を行った。固有値の推移状況は、12.801, 3.991, 3.227, 2.709, 2.176, 1.748, 1.443, 1.367, 1.288, 1.193, 1.082, .991…であった。男子と同様な主成分分解を探索し、6主成分分解が最も解釈可能であった。次に、曖昧な項目を除去して(項目3, 6, 29, 31, 32, 38, 42, 46, 50, 54), 再度6主成分分解を求めたが、再び曖昧な項目が現れた(項目1, 13, 16, 33)。そこで、これらを除いて6主成分分解をみたところ、Table 2-bに表すように、明確な解を得ることができた。

自己の心理学的状態を表す項目に代表される主成分は、第Ⅰ主成分のみであった。高い負荷である項目は自己の目標に対する意欲を示しているため、これは、“自己実現的態度”と命名した。

Table 2-b

女子における心理学的健康尺度に関する主成分分析(直交回転)の結果: 主成分負荷量

		I	II	III	IV	V	VI	h^2
〔I: 自己実現的態度〕 $\alpha = .882$; $Z = 1.659$, $p = .008$; $m = 2.55$, $SD = .73$								
21(HS-1)	自分の夢を実現しようと意欲に燃えている。	.827	.065	.052	.011	.161	-.042	.719
20(US-1)	本当に自分のやりたいことが何なのか分らない。	.809	.136	.186	.126	-.049	-.037	.727
25(HS-1)	情熱をもって何かに取り組んでいる。	.775	.119	.058	.133	.123	.125	.667
45(US-1)	自分には目標というものがない。	.772	.169	.146	.077	.099	-.043	.663
9(US-1)	何も熱中できるものがない。	.759	.093	.107	.111	.008	.068	.613
18(HS-1)	自分に妥協せずに真剣にぶつかっていている。	.534	.269	-.072	-.039	.319	.178	.498
37(HS-2)	自分のはびのびと生きていると感じる。	.468	.234	.339	.116	.267	.145	.494
〔II: 対人緊張のなさ〕 $\alpha = .842$; $Z = 1.111$, $p = .169$; $m = 2.26$, $SD = .52$								
34(UO-2)	人から何か言われないか、変な目で見られないかと気にしている。	.016	.689	.210	-.045	.083	-.061	.532
8(UO-2)	人に対して自分のイメージを悪くしないかと恐れている。	.028	.661	.154	.034	-.050	-.099	.475
17(UO-2)	自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。	.079	.646	.313	.115	.101	.073	.550
47(US-2)	何をするでも人の意見を求めてしまう。	.228	.634	-.048	.045	-.005	-.210	.502
39(UO-2)	人前では何をするにも動作がぎこちなくなってしまう。	.004	.604	.081	.086	.108	.190	.427
41(US-2)	何にでも迷ってしまう。	.175	.598	.016	.152	.039	-.010	.413
11(US-2)	いろいろなことを考えてしまって結局行動できない。	.358	.556	.102	.122	.143	.082	.490
52(US-2)	思ったことをすぐ行動にあらわせない。	.270	.525	-.063	-.005	.164	.193	.417
56(HO-1)	非難や反感を恐れない。	.054	.510	-.038	-.176	.317	-.068	.401
24(HO-1)	人前でもありのままの自分を出せる。	.215	.504	.194	.007	.237	.340	.510
22(US-2)	気になると同じことをいつまでも考えてしまう。	.082	.498	.221	.018	-.060	-.180	.340
〔III: 心の緊張のなさ〕 $\alpha = .796$; $Z = 1.348$, $p = .053$; $m = 2.65$, $SD = .53$								
30(US-3)	うっ積した気持ちのためについ衝動的に行動してしまう。	.057	.062	.702	.175	-.032	-.050	.534
28(UO-2)	無理して人に合わせようとして窮屈な思いをしている。	.112	.390	.836	.059	-.027	.198	.613
57(US-3)	いらいらすると自分を抑えられなくなり衝動的になってしまう。	.029	.013	.602	.155	.035	-.257	.455
51(UO-1)	私は人を信用していない。	.029	.149	.598	.121	.045	.262	.466
27(UO-1)	まわりの人に好意的になれない。	.067	.063	.549	.195	.167	.286	.458
49(HS-2)	心に余裕がある。	.273	.212	.539	.108	.301	-.083	.519
4(HS-2)	わだかまりがなくスカッとした気分である。	.384	.180	.457	.102	.320	.115	.515
23(HS-2)	一日一日に心残りが無い。	.371	.187	.434	.009	.101	-.005	.371
〔IV: 家族に対する肯定的感情〕 $\alpha = .844$; $Z = 2.659$, $p = .001$; $m = 3.20$, $SD = .71$								
53(UO-3)	親は自分を受け入れてくれていると感じる。	.089	.076	.172	.840	-.007	-.011	.749
40(UO-3)	家族とは肌が合わない感じがしている。	.012	.030	.155	.833	-.031	.027	.721
10(UO-3)	家族は自分に対して理解を示してくれていないと思う。	.083	.076	.168	.799	.134	.009	.697
19(UO-3)	自分は家族の中ではいてもいなくてもいい存在だと感じる。	.244	.060	.128	.893	.126	.037	.577
〔V: 自他の受容〕 $\alpha = .680$; $Z = 1.948$, $p = .001$; $m = 2.94$, $SD = .44$								
12(HO-3)	他人の良いところ悪いところありのままに認められる。	.104	.007	.158	.109	.689	.107	.534
48(HO-3)	自分とは違った意見をもった人とも親しくできる。	-.028	.148	.044	.038	.664	-.011	.467
35(HO-3)	自分とは違った意見を素直に受けとめることができる。	.019	-.053	.250	.061	.641	-.121	.495
26(HS-3)	自分の良いところ悪いところありのままに認めることができる。	.285	.180	.090	.023	.495	.250	.430
36(HS-1)	自分でなければできないことをやろうとしている。	.362	.034	-.222	-.009	.489	.057	.424
15(HS-3)	自分なりの個性を尊重したいと思う。	.216	.199	-.026	.005	.434	.184	.309
〔VI: 異性への関心〕 $\alpha = .603$; $Z = 3.286$, $p = .001$; $m = 3.16$, $SD = .59$								
14(HO-2)	異性に強い関心がある。	.008	-.006	-.101	-.008	.072	.751	.580
44(HO-2)	特定の異性に対して恋愛感情を抱くことができる。	.119	.071	.110	.009	-.003	.711	.537
7(HO-2)	皆と一緒にいるだけで安心感を得られるときがある。	.001	-.285	.145	.055	.111	.582	.433
主成分固有値		4.703	4.496	3.366	2.834	2.754	2.166	20.320

N=345

初期主成分固有値 ≥ 1.647 , 初期説明率 52.1% α 値: 最終構成項目での α 係数; Z値: Kolmogorov-Smirnovの検定; m値: 構成項目の合計得点を項目数で割った値;

SD値: 標準偏差値

第Ⅳ主成分と第Ⅵ主成分は、他者との関係性を表す項目で高い負荷が認められた。第Ⅳ主成分は、男子の第Ⅵ主成分にあたり、“家族に対する肯定的感情”とした。第Ⅵ主成分は、異性に対する態度を表す項目の負荷が高いため、“異性への関心”と名づけた。項目7は、必ずしも異性との関係を表現しているわけではないが、異性関係の中で得られる安心感が重要であると解釈できよう。

次に、残りの主成分について述べる。第Ⅱ主成分に負荷が高い項目は、対人不安、自分の行動に対する自信や、自分の考えの表明に関するものであり、この主成分は、“対人緊張のなさ”と命名した。第Ⅲ主成分は、衝動性や充実感を表す項目の負荷が高く、“心の緊張のなさ”と名づけた。第Ⅴ主成分では、他者や自己の受容を示す項目が大きな負荷をみせたので、この主成分は、“自他の受容”とした。

(3) 下位尺度得点の算出

男女それぞれで、以下のようにして心理学的健康下位尺度得点を算出した。最終の主成分分析で各主成分について負荷量.400を上回る項目をその主成分の代表項目として、代表項目の単純平均値を求め、これを下位尺度得点とした。また、それぞれの下位尺度で α 係数を求めたところ、男子では.685～.850、女子では.603～.882の範囲にあり、まずまずの高さであった。これらの結果は、Table 2-aと2-bに付してある。なお、男女それぞれでの下位尺度得点間の相互相関値をAppendix 4に示す。

男女それぞれで下位尺度得点間の相互比較を行った(t 検定)。男子では、“Ⅵ.家族に対する肯定的態度”>“Ⅷ.現実感覚”>“Ⅳ.開放性”=“Ⅶ.他者の受容”>“Ⅲ.自己実現的態度”>“Ⅱ.充実感”=“Ⅴ.自信”>“Ⅰ.対人緊張のなさ”(5%水準)という傾向が得られた。女子では、“Ⅳ.家族に対する肯定的感情”=“Ⅵ.異性への関心”>“Ⅴ.自他の受容”>“Ⅲ.心の緊張のなさ”>“Ⅰ.自己実現的態度”>“Ⅱ.対人緊張のなさ”(1%水準)の順であった。

次に、尺度中性点(2.5)との比較を試みた(対応のある t 検定)。男子では、中性点に比べて、Ⅵ.家族に対する肯定的態度、“Ⅷ.現実感覚”、“Ⅳ.開放性”、“Ⅶ.他者の受容”、“Ⅲ.自己実現的態度”は有意に高く($p<.01$)、“Ⅰ.対人緊張のなさ”は有意に低かった($p<.001$)。“Ⅱ.充実感”と“Ⅴ.自信”は、中性点と異ならなかった。女子をみると、“Ⅳ.家族に対する肯定的感情”、“Ⅵ.異性への関心”、“Ⅴ.自他の受容”、“Ⅲ.心の緊張のなさ”が中性点を有意に上回り($p<.001$)、“Ⅱ.対人緊張のなさ”が中性点を有意に下回っていた($p<.001$)。“Ⅰ.自己実現的態度”では中性点からの偏りは認められなかつ

た。

既存尺度

まず、男女別に各項目平均値が項目平均値が a)1.5を上回るか、b)3.5を下回るかを t 検定によって検討した。男女ともに、身体・精神的健康尺度の項目11(“ノイローゼ気味で何もすることができない。”)が1.5を有意に上回らなかった。これを除いて、各尺度ごとに項目-全体得点相関分析(当該項目得点と当該項目を除く得点の間の相関)を行った。

身体的不調、うつ、および孤独感の3尺度では、いずれの場合も.300以上の相関値が得られた。自尊心尺度では、項目8(“私は、もっと自分を尊敬できたらと思う。”)での相関値が低かったのを、これを除いて再度分析を行うと、良好な結果が得られた。各尺度項目で α 係数を求めると、.790以上の値であり、十分な信頼性が得られた。これらの結果をTable 3に示す。

本研究では、これらの各尺度構成項目の単純平均値を尺度得点とした。男女それぞれでの既存尺度得点間の相互相関値をAppendix 5に示す。これらの相関値の方向や大きさは、先行研究と一致している(諸井, 1995参照)。

Table 4に示すように、男女差を検討すると、孤独感と自尊心では男子のほうが高く、身体的不調では女子のほうが高かった。次に、各尺度得点と尺度中性点(2.5)との比較をしたところ、サンプル全体、男子、女子のいずれでも、身体的不調(全体: $t=13.44$, $df=603$; 男子: $t=10.59$, $df=258$; $t=8.65$, $df=344$), うつ($t=11.36$; $t=8.54$; $t=7.65$), および孤独感($t=19.59$; $t=10.14$; $t=17.44$)は、中性点よりも有意に低く、自尊心($t=8.00$; $t=7.04$; $t=4.45$)は中性点よりも有意に高い傾向が認められた(すべて $p<.001$)。これらの傾向は、本研究で対象としたサンプルがおおむね健常学生から成ることを考えれば、当然であろう。

心理学的健康の類型

心理学的健康の類型を探索的に検討するために、クラスター分析を用いて被験者の分類を試み、各クラスターの心理学的健康得点や既存尺度得点の特徴を検討した。

(1) クラスター分析

男女別に、心理学的健康下位尺度得点を対象とするクラスター分析を実施した。男子では8得点、女子では6得点が用いられた。得点はすべて分析前にZ得点化し、ユークリッド距離の2乗を基にしたクラスター分析(Ward法)を行った。クラスターに含まれる被験者数を加味しながらデンドグラムを吟味して、

Table 3

身体的不調, うつ, 孤独感, および自尊心に関する各尺度の検討
 - 当該項目得点と当該項目を除く総得点との相関値(a) -

	男子(N=259)	女子(N=345)	全体(N=604)
〔身体的不調〕			
DLH3	.455	.505	.481
DLH6	.591	.608	.603
DLH10	.603	.521	.551
DLH15	.431	.493	.469
DLH18	.660	.694	.678
DLH21	.574	.547	.563
α 値	.796	.803	.800
	Z=1.360	Z=1.298	Z=1.840
	p=.050	p=.069	p=.002
〔うつ〕			
DLH1	.301	.402	.357
DLH4	.613	.622	.618
DLH7	.596	.699	.652
DLH9	.702	.703	.702
DLH13	.593	.637	.619
DLH16	.671	.708	.691
DLH19	.631	.632	.632
DLH22	.581	.636	.610
α 値	.850	.873	.863
	Z=1.760	Z=1.245	Z=1.812
	p=.004	p=.090	p=.003
〔孤独感〕			
DLH2	.545	.568	.561
DLH5	.455	.604	.546
DLH8	.456	.587	.531
DLH12	.554	.479	.514
DLH14	.584	.668	.630
DLH17	.490	.639	.576
DLH20	.487	.492	.491
DLH23	.428	.531	.486
α 値	.792	.840	.822
	Z=1.725	Z=1.381	Z=2.073
	p=.005	p=.044	p=.001
〔自尊心〕			
SE1	.594	.643	.623
SE2	.664	.687	.679
SE3	.428	.470	.444
SE4	.625	.708	.673
SE5	.690	.681	.688
SE6	.564	.625	.600
SE7	.544	.579	.564
SE9	.578	.528	.550
SE10	.623	.588	.602
α 値	.863	.874	.870
	Z=1.523	Z=1.421	Z=1.559
	p=.019	p=.035	p=.016

(a): すべて $p<.001$

Z値: Kolmogorov-Smirnov の正規性検定

Table 4

既存各尺度における男女差-*t*検定-

	男子(N=259)	女子(N=345)	<i>t</i> 検定
身体的不調	2.09(.63)	2.21(.61)	<i>t</i> =-2.48 <i>df</i> =602 <i>p</i> =.013
うつ	2.17(.62)	2.24(.63)	<i>t</i> =-1.34 <i>df</i> =602
孤独感	2.16(.54)	2.01(.52)	<i>t</i> =3.52 <i>df</i> =602 <i>p</i> =.001
自尊心	2.76(.59)	2.63(.56)	<i>t</i> =2.65 <i>df</i> =602 <i>p</i> =.008

男女ともに4つのクラスターから構成されると判断した。ただし、女子では、第IV群の構成人数が少数であったので(*N*=16)、各クラスターの分析の際には統計的検定の対象にできなかった。

(1) 各クラスターの特徴

男女それぞれで得られた各クラスターの特徴を明らかにするために、心理学的健康下位尺度得点と既存尺度4得点を従属変数とし、クラスターを独立変数とする一元分散分析を行った。この結果をTable 5-aと5-bに示す。

①男子

I群では、8側面のすべてで心理学的健康が最も低かった。また、既存尺度についても、身体的不調、うつや、孤独感が高く、自尊心も低かった。したがっ

Table 5-a

心理学的健康8得点と既存尺度得点に関するクラスター別平均値と一元分散分析の結果 - 男子 -

	I. 対人緊張のなさ	II. 充実感	III. 自己実現的態度	IV. 開放性
I群 <i>N</i> =58	-.762(.752)a	-.952(.799)a	-.657(1.012)a	-.970(.861)a
II群 <i>N</i> =43	1.328(.790)c	.762(.948)d	.854(.781)c	.375(.844)b
III群 <i>N</i> =95	-.116(.828)b	.263(.717)c	-.061(.885)b	.237(.969)b
IV群 <i>N</i> =63	-.030(.627)b	-.041(.909)b	.114(.832)b	.280(.678)b
一元分散分析	<i>F</i> =63.958 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =41.181 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =24.407 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =32.217 <i>p</i> =.001
	V. 自信	VI. 家族に対する肯定的感情	VII. 他者の受容	VIII. 現実感覚
I群 <i>N</i> =58	-.992(.681)a	-.442(.809)a	-.781(.992)a	-.728(.947)a
II群 <i>N</i> =43	1.063(.828)d	-.042(1.142)b	.651(.985)d	.492(.654)b
III群 <i>N</i> =95	-.130(.767)b	.564(.693)c	.277(.832)c	.689(.596)b
IV群 <i>N</i> =63	.384(.707)c	-.415(1.049)a	-.143(.739)b	-.705(.784)a
一元分散分析	<i>F</i> =70.073 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =21.716 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =27.015 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =71.038 <i>p</i> =.001
	身体的不調	うつ	孤独感	自尊心
I群 <i>N</i> =58	2.47(.64)c	2.83(.55)d	2.67(.52)b	2.23(.53)a
II群 <i>N</i> =43	1.94(.61)a	1.74(.39)a	1.90(.44)a	3.24(.56)c
III群 <i>N</i> =95	1.83(.52)a	1.93(.40)b	2.05(.47)a	2.86(.42)b
IV群 <i>N</i> =63	2.22(.58)b	2.22(.58)c	2.04(.39)a	2.77(.53)b
一元分散分析	<i>F</i> =16.928 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =55.886 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =32.118 <i>p</i> =.001	<i>F</i> =36.158 <i>p</i> =.001

()内: *SD*

異なる英文字は5%水準で有意に互いに異なることを表す(最小有意差法)。

一元分散分析: *df*=3/255

て、この群は、不健康群といえよう。

Ⅱ群は、Ⅰ群の対極にあり、“家族に対する肯定的感情”を除く7側面で肯定的な心理学的健康状態をみせた。また、既存尺度4得点のいずれもこの群が最も健康的であることを示した。

Ⅲ群とⅣ群は、基本的にⅠ群とⅡ群の中間に位置するが、次の点で特徴的である。Ⅲ群は、“家族に対する肯定的感情”や“現実感覚”の点で最も健康的である。他方、Ⅳ群は、この2側面で最も健康的でない。また、“充実感”や“他者の受容”ではⅢ群、“自信”ではⅣ群のほうがそれぞれ健康的傾向を示している。既存尺度については、Ⅲ群は、Ⅳ群に比べて、身体的不調度やうつが低い傾向にあった。

②女子

心理学的健康6得点のうち“異性への関心”を除き、Ⅰ群の健康度が最も高く、Ⅲ群の健康度が最も低く、Ⅱ群はその中間にあった。この傾向は、既存尺度のうち、うつ、孤独感や、自尊心でみられた。“異性への関心”では、Ⅰ群とⅡ群がⅢ群に比べて高かった。既存尺度の身体的不調でも同様の傾向がみられた。

Table 5-b

心理学的健康6得点と既存尺度得点に関するクラスター別平均値と一元分散分析の結果 一女子一

	I. 自己実現的態度	II. 対人緊張のなさ	III. 心の緊張のなさ	IV. 家族に対する肯定的感情
I 群 N= 73	1.280(.440)c	1.034(.785)c	.817(.798)c	.606(.666)c
II 群 N=143	-.016(.689)b	-.079(.872)b	.284(.760)b	.302(.724)b
III 群 N=113	-.847(.657)a	-.583(.714)a	-.784(.786)a	-.466(.894)a
IV 群 N= 16	.285(.900)	.107(1.066)	-.735(.753)	-.217(.725)
一元分散分析	F=252.223 p=.001	F=91.435 p=.001	F=106.990 p=.001	F=50.517 p=.001
	V. 自他の受容	VI. 異性への関心		
I 群 N= 73	.832(.744)c	.136(1.275)b		
II 群 N=143	-.029(.863)b	.224(.706)b		
III 群 N=113	-.647(.810)a	-.438(1.001)a		
IV 群 N= 16	1.032(.811)	.476(.820)		
一元分散分析	F=72.256 p=.001	F=16.298 p=.001		
	身体的不調	うつ	孤独感	自尊心
I 群 N= 73	2.04(.61)a	1.69(.41)a	1.63(.40)a	3.20(.45)c
II 群 N=143	2.07(.54)a	2.10(.51)b	1.92(.42)b	2.69(.39)b
III 群 N=113	2.46(.61)b	2.72(.52)c	2.38(.48)c	2.22(.44)a
IV 群 N= 16	2.55(.63)	2.64(.56)	1.92(.51)	2.53(.64)
一元分散分析	F=17.274 p=.001	F=105.118 p=.001	F=68.718 p=.001	F=121.056 p=.001

()内: SD

異なる英文字は5%水準で有意に互いに異なることを表す(最小有意差法)。

一元分散分析(df=2/326)は、Ⅰ群、Ⅱ群、Ⅲ群を対象として行った。

心理学的健康と既存尺度との関係

心理学的下位尺度と既存尺度との関係を探るために、これらの変数を対象とする主成分分析を男女それぞれで行った(なお、これら2組の変数間のピアソン相関値をAppendix 6に示す)。この目的は、各変数の分散の共有がどのようなパターンになっているかを調べることにあるので、固有値1.000を基準に主成分数を決定し、直交回転を施した。男女ともに3主成分解が得られ、これらをTable 6-aと6-bに示す。なお、主成分の解釈は、主成分負荷量.400を基準に行い、複数の主成分に重複して高い負荷をみせている場合には相対的傾向を重視した。

①男子

第Ⅰ主成分は、自尊心の維持を核とし、自己に対する自信感(“自信”, “自己実現的態度”, “充実感”)と対人関係の良好さ(“対人緊張のなさ”, “他者の受容”)から成る。第Ⅱ主成分は身体的不調の軸であると解釈でき、“現実感覚”が高い負荷をみせている。第Ⅲ主成分は孤独感の生起に関わり、他者との心理的障壁がなく(“開放性”), 家族に対して肯定的な態度をもつことが(“家族に対する肯定的感情”), 孤独感の抑制につながると解釈できよう。

Table 6-a

男子における心理学的健康 8 得点と既存尺度 4 得点に関する主成分分析
(直交回転)の結果: 主成分負荷量

	I	II	III	h^2
V. 自信	.745	.010	.189	.591
I. 対人緊張のなさ	.737	.326	-.161	.675
自尊心	.697	.314	.276	.661
III. 自己実現的態度	.688	-.134	.126	.507
II. 充実感	.657	.324	.354	.662
うつ	-.595	-.550	-.315	.756
VII. 他者の受容	.485	.127	.201	.292
身体的不調	-.070	-.791	-.154	.654
VIII. 現実感覚	.152	.782	.113	.647
IV. 開放性	.386	.059	.775	.753
孤独感	-.499	-.112	-.735	.802
VI. 家族に対する肯定的感情	-.096	.386	.657	.590
主成分固有値	3.513	2.049	2.028	7.590

N = 259

初期固有値 ≥ 1.055 ; 初期説明率 63.2%

Table 6-b

女子における心理学的健康 6 得点と既存尺度 4 得点に関する主成分分析
(直交回転)の結果: 主成分負荷量

	I	II	III	h^2
自尊心	.788	.317	.148	.743
I. 自己実現的態度	.758	.185	.070	.614
II. 対人緊張のなさ	.732	.216	-.108	.594
V. 自他の受容	.718	-.058	.246	.579
身体的不調	-.047	-.805	.012	.650
IV. 家族に対する肯定的感情	.122	.682	.071	.485
うつ	-.597	-.642	-.133	.786
III. 心の緊張のなさ	.493	.638	.146	.671
VI. 異性への関心	.018	.013	.947	.897
孤独感	-.509	-.320	-.801	.723
主成分固有値	3.123	2.220	1.401	6.744

N=345

初期固有値 ≥ 1.047 ; 初期説明率 67.5%

②女子

第 I 主成分は自尊心の維持を中心とし、目標に対する積極的態度(“自己実現的態度, “心の緊張のなさ”)と良好な対人関係(“対人緊張のなさ”)が, “自他の受容”とともに, 自尊心の維持に寄与している。第 II 主成分は身体的不調の軸であるといえ, “家族に対する肯定的態度”や“心の緊張のなさ”が高い負荷を示している。第 III 主成分は孤独感を核としており, “異性への関心”の高まりが孤独感を低下させることが表されている。

IV. 考 察

心理学的健康の基本的構造

本研究では, 平石(1990a)の尺度を改変して, 青年の心理学的健康の基本的構造を検討した。まず, 平石の仮定に基づいて, LISREL 7(Jöreskog & Sörbom, 1988)を利用した高次主成分分析を試みた。しかしながら, 良好な結果が得られなかった。そこで, 測定項目全体を対象とした探索的分析(主成分分析, 直接*oblimin*法)を行ったところ, 男子では 8 主成分解, 女子では 6 主成分解が妥当であると判断できた。なお, 木村・相良(1998)は, “健康-対他者”, “健康-対自己”, “不健康-対他者”, “不健康-対自己”という下

位領域ごとに、主成分分析を行い、ほぼ平石と同様な主成分を得ている。被験者を追加した本研究でも同様な結果が認められた。したがって、これは、a) 4 領域をアприオリに認めてしまうか、b) 4 領域自体を仮説検証の対象にするかの問題であることになる。本研究では、b)の立場をとった。

男女ともに共通して現れた主成分は、“自己実現的態度”，“対人緊張のなさ”，“家族に対する肯定的感情”であった。人生目標の設定とそれへの努力の有無や、他者との関係に伴う懸念の有無は、青年期にある男女に共通な心性要素であるといえる。また、この時期には家族からの心理的独立が主要な課題となっている。

次に、男女差をみる。まず、対人関係の側面については、男子では“他者の受容”や“開放性”，女子では“異性への関心”が現れた。男子は、他者との関係性を自己と切り離して試みているのに、女子は、自他を一体のものとして試みている（“自他の受容”）。ところで、Deaux(1977)によれば、自己呈示方略として、“地位主張的モード”と“親和的意図モード”がある。性役割の形成とともに、青年期初期の頃には、前者は男子で、後者は女子で顕在的な自己呈示方略となる。つまり、男子は課題達成的になり、女子は対人関係志向的になる。このことを前提にすると、本研究の結果は、以下のように解釈できる。男子の場合、他者が自己にとっての“道具”と見做されがちになるため、自他の分離意識が生じる。ところが、女子は、対人関係を重視しがちになるために、自他の融合が生じるのかもしれない。また、女子にとっての異性は、同性の仲間とは異なる存在として独立的に意識されるのであろう。

また、平石(1990a)の“対自己”の側面については、男子では“充実感”と“現実感覚”，女子では“心の緊張のなさ”（ただし、一部対人項目）が現れた。自己と身体の一体感の有無が、男子では独立しているのに、女子では充実感と一体となっている。つまり、男子の身体感覚が独立しているのに対して、女子のそれは心の状態と融合していることになる。先述したDeaux(1977)の考えに従うと、身体サイズや外観の違いが先の2つの自己呈示方略の選択の男女差をもたらしている。この考えを援用すると、男子にとっては、身体が自己表現のための道具としての意識されていると解釈できるが、これも今後の検討課題であらう。

男子でのみ、自分の考えや行動に対する自信を示す主成分（“自信”）が得られた。先述したように、課題達成志向が強い男子では、自分に対する自信が健康の重要な要素となる。

ところで、Marsh(1996)は、Rosenbergの自尊心尺度項目の表現方向の正負と因子出現の交絡の問題を検討した。LISREL 7を用いた確証的因子分析によって、次の2点が確認された。a)単一の基底因子の仮定が妥当であるが、肯定的表現項目、否定的表現項目それぞれで独自性分散の間に相関が存在する、b)言語能力の発達とともに単一性が強まる。なお、青年の生活感情を検討した内田(1990)の研究でも、青年の生活感情の検討をする中で、自己認知が、肯定的表現項目から構成される“自己受容”と否定的表現項目に高い負荷を示す“自己萎縮”の2側面に分離することが見出された。交絡の問題は孤独感を測定する尺度についてもみられる。Russell, Cutrona, Rose, & Yurko(1984)は、改訂UCLA孤独感尺度が社会的孤独感と情動的孤独感の2次元から成ることを主張したが、諸井(1992)は、これらの2次元と尺度項目の表現の方向性(孤独方向に表現されているか、反孤独方向に表現されているか)が交絡していることを示した。

本研究で得られた主成分をみると、男子では“家族に対する肯定的感情”，“他者の受容”，“現実感覚”が不健康方向表現項目あるいは健康方向表現項目のみから構成されており，“対人緊張のなさ”も1項目を除き不健康方向表現項目から成っている。また、女子でも，“家族に対する肯定的感情”，“自他の受容”，“異性への関心”が同一の表現方向の項目から成り立っている。したがって、本研究で得られた側面についても、Marsh(1996)と同様な検討が必要とされよう。

次に、男女それぞれで下位尺度得点間の比較結果について考察しよう。男子では，“Ⅵ.家族に対する肯定的態度”＞“Ⅷ.現実感覚”＞“Ⅳ.開放性”＝“Ⅶ.他者の受容”＞“Ⅲ.自己実現的態度”＞“Ⅱ.充実感”＝“Ⅴ.自信”＞“Ⅰ.対人緊張のなさ”，女子では，“Ⅳ.家族に対する肯定的感情”＝“Ⅵ.異性への関心”＞“Ⅴ.自他の受容”＞“Ⅲ.心の緊張のなさ”＞“Ⅰ.自己実現的態度”＞“Ⅱ.対人緊張のなさ”という傾向が認められた。男女共通の主成分をみると、男女ともに、家族に対して肯定的感情を強く抱いている反面(“家族に対する肯定的態度”)，対人関係に対する懸念を強くもっていた(“対人緊張のなさ”)。また、人生目標の設定とそれへの努力傾向は、相対的に女子のほうで低いといえる。

ところで、本研究では、心理学的健康下位尺度得点に基づく被験者の類型化をクラスター分析によって試みた。男子では4クラスター比較，女子では3クラスター比較を行った。細部をみると若干異なるが、基本的には、健康－不健

健康の一次元上に各クラスターが位置づけられた。つまり、男子でのⅡ群、女子でのⅠ群が健康群といえ、男子でのⅠ群、女子でのⅢ群が不健康群である。しかし、“家族に対する肯定的感情”のみが強い男子でのⅢ群、異性への関心のみが健康群と同等である女子でのⅡ群など、興味深い傾向もあった。しかし、本研究の限りでは、抽出クラスター数の少なさによるのかもしれないが、“健康－不健康”の一次元的配列しか認められないといえよう。

心理学的健康尺度によって測定されている概念と既存概念との関係

本研究では、主成分分析によって、平石(1995a)の尺度に基づく心理学的健康の諸側面と、既存尺度による心理学的概念との関連を検討した。主成分分析の結果によれば、男女ともに、“自尊心”、“身体的不調”、“孤独感”をそれぞれの核として心理学的健康の各側面を位置づけられる。

第Ⅰ主成分には、男女共通の心理学的健康の側面である“自己実現的態度”と“対人緊張のなさ”が強く寄与していた。また、男子では“自信”、“充実感”、“他者の受容”が、女子では“自他の受容”が、それぞれ強く関わっていることから、自己の心理的安定性や他者との関係の良好さが自尊心を維持していることになる。

第Ⅱ主成分では、男子では“現実感覚”、女子では“家族に対する肯定的感情”と“心の緊張のなさ”が強い負荷をみせた。男子では、身体と心の遊離が身体的不調感と密接な示しているが、女子では、家族との心理的乖離や心の中に何かわだかまりがあることが身体的不調につながる。

第Ⅲ主成分をみると、男子の場合には“開放性”と“家庭に対する肯定的感情”、女子については“異性への関心”が、高い負荷を示した。男子では、他者との関係や家族関係が孤独感の生起に重要となり、女子では、異性関係が重要な働きを示すことになる。

ところで、既存尺度得点の男女差の分析では、孤独感と自尊心では男子のほうが高い傾向が認められた。これは、先行研究でも認められている男女差である(諸井, 1995)。また、身体的不調では女子のほうが高かったが、女子では周期的な生理的变化のために、男子より身体的バランスが崩れやすいことを示していると考えられる。なお、うつでは男女差がなかった。女子のほうがうつ病に陥りやすいという所見(中西・深津・沢志, 1997)を踏まえると、本研究で用いているうつ測度は、異常域までを触診していないのかもしれない。

心理学的健康の“心理学的”意義

本研究では、青年の心理学的健康の基本的構造の探索的構造を試み、一定の

知見を得ることができた。最後に、そもそも“心理学的健康とは何か”について触れておきたい。身体的健康と心理学的健康との明確な差異は、前者が身体・生理学的な水準での個体の状態に関する概念であるのに対して、後者はあくまでも当事者の知覚によっているということである。つまり、当事者が自己の心理学的状態をどのように定義するかにかかっているのである。

遠藤(1995)によれば、臨床家の伝統的な考えでは、真の心理学的健康の実現には“正確な自己認識”が不可欠とされる。しかし、このような“正確で客観的な自己概念”への疑問が提示され、a)自己を非現実的に肯定的に捉える、b)外界に対する自己の統制力を現実以上に大きいと考える、c)自己の将来をバラ色に描くことを基本要素とする肯定的幻想が、心理学的健康にとって重要であるという考えが提出されている。自己を肯定的方向に歪曲して認知することが重要なのである。

このような考えは、先述した青年期危機説と平穩説の対置に深い関連をもっている。そもそも青年期危機説は、現実の自己との対決と格闘を前提とし、それを心理的成長に不可欠な要素として仮定している。そのような危機的状況下におかれたとしても、青年がその危機を回避する手段として自己状態の肯定的歪曲を行うとすれば、“疾風怒濤”的心性は現れず、平穩説と一致する傾向となる。つまり、心理学的健康の観点からは、自己状態を肯定的方向に歪曲しながら心理学的健康感を維持すること自体に対して価値的評価はできない。しかし、先述した岡田(1991, 1993)が整理しているような「現代」青年の心性を心理学的危機を回避しながらも揺れ動いている心理的状态として特徴づけることができるかもしれない。そのようなメカニズムを実証的に明らかにすることが今後の重要な作業となるであろう。

ところで、Compton *et al.*(1996)の考えでは、主観的幸福感とは心理学的健康の構成要素である。しかし、主観的幸福感の研究の流れをみると(根建・田上, 1995)、幸福感とは、基本的に次の3つの定義特徴をもっている。a)内的に感じられ判断される、b)感情成分と認知的成分が仮定されている、c)人生すべての側面に関わる幅広い評価である。また、生活感情の点から心理学的健康を扱っている研究もある。たとえば、内田(1990)は生活空間から生じる持続的で偏在的な気分感情として生活感情を定義している。さらに、本研究で得られた心理学的健康主成分のうち、ほとんどが独立な研究対象になっている。例を挙げると、“対人緊張のなさ”は対人不安として(諸井, 1997)、“開放性”は自己開示として扱われている(榎本, 1987)。さらに、“充実感”についても同様

である。ここで複雑な問題が生じる。つまり、個々に扱われている心理学的概念が、時には一般的な健康と結びつけられていることである。たとえば、大野(1984)は、充実感を自我同一性統合過程の中での自己肯定的な感情として定義している。本研究では、平石(1990a)による研究を出発点として心理学的健康の基本的構造を探索する作業に着手した。このような探索的試みとともに、心理学的健康に関するさまざまな類縁概念を整理する作業も今後必要であろう。

＜付記＞

- (1) 本研究の構想は、木村哲也君と相良幸江嬢(平成9年度社会学科社会心理学コース卒業)が筆者の指導の下で取り組んだ卒業研究(木村・相良, 1998)に由来する。その後、追加データを収集し、本研究での分析データとした。計画・実施段階・整理段階での2人の熱意に敬意を表する。
- (2) 追加データの整理の際に、平成9年度社会心理学コース2年次生(岩崎和真, 宇佐美絢子, 川口真由, 国枝丈哲, 榊原裕恵, 櫻井ゆかり, 鈴木貴子, 鈴木弥生, 染谷知雅, 高橋 俊, 平田幸恵, 廣田祐子, 松井文恵, 安江理恵子)と社会人編入学3年次生(西堀好恵, 平井加苗)の助力を得た。
- (3) 質問紙実施にあたって、静岡県中部看護専門学校教務課長塩沢まさ子先生、名城大学教職課程部助教授伊藤康児先生のご協力を得た。
- (4) 本研究では、統計的分析のために、SPSS for Windows6.13JおよびSPSS/PC+(V3.0J版)を用いた。
- (5) E-Mail: moroi@hss.shizuoka.ac.jp

V. 引用文献

- Compton, W.C., Smith, M.L., Cornish, K.A., & Qualls, D.L. 1996 Factors structure of mental health measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 406-413.
- Deaux, K. 1977 Sex differences. In T. Blass(Ed.), *Personality variables in social behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. Pp.357-377.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, 11, 134-144.
- 榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について心理学研究, 58, 91-97.
- Erikson, E.H. 1959 *Psychological issues: Identity and the lifecycle*. International University Press. (小此木啓吾訳編『自我同一性－アイデンティティとライフ・サイクル－』誠信書房 1973)

- 平石賢一 1990a 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究, 38, 320-329.
- 平石賢一 1990b 青年期における自己意識の発達に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 37, 217-234.
- Jöreskog, K.G. & Sörbom, D. 1988 *LISREL 7: A guide to the program and applications. 2nd edition.* Chicago: SPSS Inc.
- 加藤隆勝 1987 『青年期の意識構造—その変容と多様化—』 誠信書房
- 木村哲也・相良幸江 1998 青年期における心理学的健康と自己観—相互独立的自己観と相互協調的自己観を中心として—(1)・(2) 静岡大学人文学部社会学科社会心理学コース平成9年度卒業論文 未公開
- Marsh, H.W. 1996 Positive and negative global self-esteem: A substantively meaningful distinction or artifacts? *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 810-819.
- 諸井克英 1991 生活事態変化に伴う孤独感 人文論集(静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告), 41, 29-63.
- 諸井克英 1992 改訂UCLA孤独感尺度の次元性の検討 人文論集(静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告), 42, 23-51.
- 諸井克英 1995 『孤独感に関する社会心理学的研究—原因帰属および対処方略との関係を中心として—』 風間書房
- 諸井克英 1996 高層集合住宅居住者における社会的支援と身体・精神的健康 社会心理学研究, 11, 180-194.
- 諸井克英 1997 セルフ・モニタリングと対人不安との関係におよぼす認知欲求の効果—女子青年の場合— 人文論集(静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告), 48(1), 31-71.
- 中西俊夫・深津尚史・沢志栄子 1997 思春期, 青年期のうつ病—1990年代の文献の概観— 思春期青年期精神医学, 7, 113-123.
- 根建由美子・田上不二夫 1995 主観的幸福感に関する展望 カウンセリング研究, 28, 203-211.
- 日本健康心理学会編 1997 『健康心理学辞典』 実務教育出版
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討—教育心理学研究, 32, 100-109.
- 岡田 努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究, 1, 11-18.
- 岡田 努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self.* Basic Books.
- 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究, 38, 117-125.

Appendix 1

平石(1990a)に基づく心理学的健康尺度項目の分類

〔Ⅰ：健康－対他者〕

＜自己表明・対人的積極性＞

- 1 (HO-1) 人前でもこだわらず自由に感じたままを表明できる。
- 13(HO-1) 疑問だと感じたらそれを堂々と表明できる。
- 24(HO-1) 人前でもありのままの自分を出せる。
- 31(HO-1) 自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている。
- 56(HO-1) 非難や反感を恐れない。

＜異性・友人関係＞

- 2 (HO-2) 気の許せる友だちがいる。
- 7 (HO-2) 皆と一緒にいるだけで安心感を得られるときがある。
- 14(HO-2) 異性に強い関心がある。
- 44(HO-2) 特定の異性に対して恋愛感情を抱くことができる。

＜他者受容＞

- 3 (HO-3) 両親のことを一人の人間として客観的に見ることができる。
- 12(HO-3) 他人の良いところも悪いところもありのままに認められる。
- 35(HO-3) 自分とは違った意見を素直に受けとめることができる。
- 48(HO-3) 自分とは違った意見をもった人とも親しくできる。

〔Ⅱ：健康－対自己〕

＜自己実現的態度＞

- 18(HS-1) 自分に妥協せず真剣にぶつかっていつている。
- 21(HS-1) 自分の夢を実現しようと意欲に燃えている。
- 25(HS-1) 情熱をもって何かに取り組んでいる。
- 36(HS-1) 自分でなければならないことをやろうとしている。
- 42(HS-1) 自分の秀でたものを一生懸命伸ばそうとしている。

＜充実感＞

- 4 (HS-2) わだかまりがなくスカッとした気分である。
- 23(HS-2) 一日一日に心残りが無い。
- 32(HS-2) 生活が楽しいと感じる。
- 37(HS-2) 自分のはのびのびと生きていると感じる。
- 49(HS-2) 心に余裕がある。

＜自己受容・自己信頼感＞

- 5 (HS-3) 私には私なりの人生があってもいいと思う。
- 15(HS-3) 自分なりの個性を尊重したいと思う。
- 26(HS-3) 自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる。
- 38(HS-3) 自分の個性を素直に受け入れている。
- 50(HS-3) 欠点の一つや二つあってもかまわないと思う。

Appendix 1のつづき

〔Ⅲ：不健康－対他者〕

<内閉性・人間不信>

- 6(UO-1) 人と打ち解けて話せない。
16(UO-1) まわりの人との間に壁をつくっている。
27(UO-1) まわりの人に好意的になれない。
29(UO-1) 自分は他人に対して心を閉ざしているような気がする。
51(UO-1) 私は人を信用していない。

<視線恐怖傾向・対人緊張>

- 8(UO-2) 人に対して自分のイメージを悪くしないかと恐れている。
17(UO-2) 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。
28(UO-2) 無理して人に合わせようとして窮屈な思いをしている。
34(UO-2) 人から何か言われないうか、変な目で見られないかと気にしている。
39(UO-2) 人前では何をするにも動作がぎこちなくなってしまう。

<否定的対家族感情>

- 10(UO-3) 家族は自分に対して理解を示してくれていないと思う。
19(UO-3) 自分は家族の中ではいてもいい存在だと感じる。
40(UO-3) 家族とは肌が合わない感じがしている。
53(UO-3) 親は自分を受け入れてくれていないと感じる。
55(UO-3) 家には心の落ち着ける場所がない。

〔Ⅳ：不健康－対自己〕

<目標喪失感・空虚感>

- 9(US-1) 何も熱中できるものがない。
20(US-1) 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない。
45(US-1) 自分には目標というものがない。
46(US-1) 満足感がもてない。
54(US-1) 心から楽しいと思える日がない。

<不決断・自己不自信感>

- 11(US-2) いろいろなことを考えてしまって結局行動できない。
22(US-2) 気になると同じことをいつまでも考えてしまう。
41(US-2) 何にでも迷ってしまう。
47(US-2) 何をするのでも人の意見を求めてしまう。
52(US-2) 思ったことをすぐ行動にあらわせない。

<衝動性・非現実感>

- 30(US-3) うっ積した気持ちのためについ衝動的に行動してしまう。
33(US-3) 自分の身体が自分のものでないみたいに感じることがある。
43(US-3) 現実の世界にいるのか夢の世界にいるのか分からないときがある。
57(US-3) いらいらすると自分を抑えられなくなり衝動的になってしまう。

()内の記号: (HO- “健康－対他者” HS- “健康－対自己”)
(UO- “不健康－対他者” US- “不健康－対自己”)

Appendix 2

身体・精神的健康尺度項目(諸井, 1996)の分類

(I: 身体的調子)

- 3 疲労回復剤(ドリンク・ビタミン剤)を飲みたくなる。
- 6 頭痛に悩まされる。
- 10 病気がちである。
- 15 疲れてぐったりすることがある。
- 18 からだの調子が悪い。
- 21 からだがほてったり寒気がする。

(II: うつ)

- 1 じっと静かにしていなくなる。
- 4 自分は役に立たない人間である。
- 7 みじめな気持ちである。
- 9 生きていることに意味がない。
- 11 ノイローゼ気味で何もすることができない。
- 13 ゆうつな気分である。
- 16 この世から消えてしまいたい。
- 19 人生にまったく望みをもてない。
- 22 ふさぎこみがちである。

(III: 孤独感)

- 2 私は、まわりの人たちと調子よくいっていない。
 - 5 私には、頼りにできる人がいる。
 - 8 私には、まわりの人たちとの共通点が少ない。
 - 12 私は、親しい仲間たちの中で欠くことのできない存在である。
 - 14 私は、だれとも親密にしていない。
 - 17 私には、私のことをよく知っている人がいる。
 - 20 私は、望むときにはいつでも、人とつきあうことができる。
 - 23 私には、知り合いはいるが、私と同じ考えの人はいない。
-

Appendix 3

自尊心尺度項目 (Rosenberg, 1979)

- 1 私は、全体として、自分自身に満足している。
 - 2 私は、ときどき、自分にはまったくよいところがないと思う。
 - 3 私は、たいていの人と同じくらいには、だいたいのことをうまく行える。
 - 4 私は、自分には自慢できるものがないと感じる。
 - 5 私は、ときどき、自分が役立たずだとはっきりと感じる。
 - 6 私は、ときどき、自分にはよいところがたくさんあると感じる。
 - 7 私は、自分は少なくとも他の人ぐらいは価値のある人間だと思う。
 - 8 私は、もっと自分を尊敬できたらと思う。
 - 9 私は、全体として、自分が人生の失敗者だと思いがちである。
 - 10 私は、自分自身に対して前向きな態度をとっている。
-

Appendix 4

心理学的健康下位尺度得点間の相互相関 ―ピアソン相関値―

	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
〔 男子(N=259) 〕							
I. 対人緊張のなさ	.455a	.308a	.233a	.533a	.101	.300a	.273a
II. 充実感		.462a	.481a	.463a	.293	.344a	.410a
III. 自己実現的態度			.269a	.372a	.051	.198a	.081
IV. 開放性				.473a	.321a	.314a	.236a
V. 自信					.108d	.426a	.154c
VI. 家族に対する肯定的感情						.135c	.295a
VII. 他者の受容							.223a
VIII. 現実感覚							***
	II	III	IV	V	VI		
〔 女子(N=345) 〕							
I. 自己実現的態度	.452a	.445a	.272a	.439a	.123c		
II. 対人緊張のなさ		.458a	.187a	.342a	.002		
III. 心の緊張のなさ			.403a	.324a	.132c		
IV. 家族に対する肯定的感情				.161b	.061		
V. 自他の受容					.202a		
VI. 異性への関心						***	

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$; d: $p < .10$

Appendix 5

既存尺度得点間の相互相関 ―ピアソン相関値―

	I	II	III	IV
I. 身体的不調	***	.516a	.258a	-.285a
II. うつ	.508a	***	.603a	-.693a
III. 孤独感	.228a	.583a	***	-.573a
IV. 自尊心	-.282a	-.693a	-.527a	***

対角線上段: 男子(N=259); 対角線下段: 女子(N=345)

a: $p < .001$

Appendix 6

心理学的健康下位尺度得点と既存尺度得点との関係 ―ピアソン相関値―

	身体的不調	うつ	孤独感	自尊心
〔 男子(N=259) 〕				
I. 対人緊張のなさ	-.223a	-.515a	-.310a	.509a
II. 充実感	-.268a	-.673a	-.584a	.653a
III. 自己実現的態度	-.020	-.398a	-.375a	.446a
IV. 開放性	-.245a	-.511a	-.733a	.423a
V. 自信	-.168b	-.409a	-.455a	.458a
VI. 家族に対する肯定的感情	-.287a	-.287a	-.353a	.266a
VII. 他者の受容	-.188b	-.299a	-.368a	.350a
VIII. 現実感覚	-.440	-.470a	-.261a	.319a
〔 女子(N=345) 〕				
I. 自己実現的態度	-.189a	-.565a	-.428a	.601a
II. 対人緊張のなさ	-.224a	-.525a	-.430a	.529a
III. 心の緊張のなさ	-.423a	-.698a	-.544a	.553a
IV. 家族に対する肯定的感情	-.311a	-.399a	-.278a	.348a
V. 自他の受容	-.130c	-.347a	-.399a	.557a
VI. 異性への関心	-.039	-.149b	-.456a	.167b

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$